



アメリカの子どもたちと一緒に成長できる コミックの世界を創り出したい

コミックアーティスト(漫画家)

高嶋

美沙子

さん (Misako Rocks!)



ほとんどが男性というアメリカのコミックアーティストの中にあつて、高嶋美沙子さんは異彩を放つ存在です。少女漫画というジャンルがないアメリカのコミック界に、自らの経験をベースにしたストーリー性のある漫画を持ち込み、瞬く間にティーン達の心を奪ってしまいました。現在のファン層は9〜22歳くらいと幅広く、対象に合った作品を創り続けています。今後は日本でも活躍の場所を広げていく予定です。

失うものがない状況の中で

コミックに懸けた

「最初の作品がディズニー系列から出版され、以後3年連続で次々と作品が出版されます。」

コミックを描き始めたのは、アメリカで生活を始めてからです。アルバイト先で、現地の子どもたちから、日本のアニメや漫画が流行っていると教えられ、翻訳された日本の漫画も含めて大量のコミックがありました。それらのコミックを手にとっているうちに、「これだ。これをやるために、今の『どん底』があるんだ」と思ってしまったのです。

当時、アメリカ人の夫との結婚生活はぎくしゃくし、渡米時に夢見た人形師への道も断たれ、最悪の精神状態でした。アメリカで何一つできずに、このまま日本に帰りたい、そのためには何かで一発逆転を狙うしかない、そんな気分だったのでした。

「そこで、コミックに懸けることにしました。今までに漫画を描いたこともなければ、漫画家になりたいと思ったこともありませんが、とにかく自分で漫画を描き、ニューヨークの出版社に持ち込みました。断られても何度でも書き直してプレゼンを行いました。そのうちに、エディターの人たちがアドバイスをくれるようになり、それを繰り返しているうちに、最初のオフアアが来たのでした。」

ンと仲良くなり、遠距離恋愛を経て、翌年、結婚しました。

ウイスコンシン州で暮らし始めましたが、収入の安定しない生活を支えるため7つのアルバイトを掛け持ちするうちに、気持ちのずれ違いが大きくなり、結婚生活が壊れ始めていきます。そんなときに出会ったのがコミックだったのでした。

子どものファン層を掴み

一緒に成長していく

「絵本を描き始めたり、日本でも出版計画が進んでいます。」

コミックは、日本では1つの文化として認知されていますが、アメリカでは、まだまだ読者層が限られています。ですから、常に頭の中でマーケティングをしています。対象とする年齢層に応じてストーリーや絵のスタイルを描き分けていますし、そうすることで、読者層を広げたいと考えています。

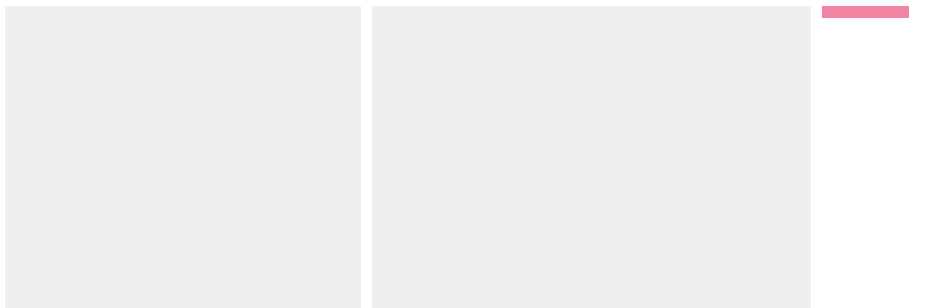
特に力を入れたいと思っているのは、小さな子どもたちです。流行に敏感で飽きやすいティーン達の心をつかみ続けるのは大変です。ですから、子どものファンを作り、そのファンと一緒に成長していくコミック作品を描き続けていきたいと思っています。また、今後は、日本の子どもたちや大人に受け入れられる作品にもチャレンジする予定です。



Profile

たかしま・みさこ
(ペンネームはMisako Rocks!)

1977年埼玉県生まれ。文学部英文学科3年在学中に、派遣留学でミズーリ州にあるトルーマン州立大学に留学。卒業後は、ニューヨークの劇団で1年間インターン。2001年に帰国し、2002年に結婚。2006年、処女作「Biker Girl」を出版。2007年、自伝的恋愛小説「Rock and Roll Love」を出版。ニューヨーク公立図書館のベスト・ティーン・ブックに選出。2008年、「Detective Jermain」を出版。2009年、NHKのドキュメンタリーに登場。日経ウーマンの「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2010」の1人に選出され、キャリアクリエイティブ部門を受賞する。日本での知名度も高まった。



Misako Rocks!さんのHP
<http://www.misakorocks.com/>



アメリカで出版されたコミックの一部。中央の本は「ベスト・ティーン・ブック」として、全米の学校や図書館に置かれている。

す。出版が決まったときは、自分でも本当に驚きました。

アメリカへの憧れから

法政大学に入学

「大学時代は、派遣留学制度を利用してミズーリ州のトルーマン州立大学に留学しています。」

周りの空気に合わせてしゃべることよりも言いたいことを言いあえる雰囲気を感じたアメリカにあこがれていた私は中学2年のときには、アメリカ留学の方法を具体的に調べました。法政大学の派遣留学なら学費が無料で奨学金も支給されると知り、「これしかない」と思ったのです。やると決めたら一途に突き進む性格はこのころから変わりません。法政大学への推薦入学がある県立高校へ進学し、確実に推薦を受けるため、3年間学年1位をキープしました。入学後も、TOEFL®などの勉強を続け、念願通り留学を果たしたのです。

留学時代に学んだ

独立心と自立心が糧に

「留学後は就職することなく、再び渡米しています。」

留学先の大学では、当初は自分の専門分野である文学や言語学などの授業を履修していました。しかし、派遣留学生の場合は、かなり自由に科目を履修することが可能だったため、せっかくなアメリカの大学にいるのだからと、日本では美大でしか受けられないようなアート系の授業も受講するようになりました。

大学は地方にあつたため、勉強の息抜きは、パーティを開いたり、音楽のライブ活動くらいでした。私は、どういうわけかパンクロックカーたちと仲良くなりました。そして、クリエイティブな活動にひかれ、アートの世界に感化されるようになっていきました。本音で語り合い、本気でけんかできる親友もでき、友情に国境が関係ないことも知りました。親がかりではないアメリカの大学生を通して、自立心や独立心を培うこともできました。

留学を通して、アートに目覚めてしまった私は、舞台の仮面やコスチュームを作る人形師にあこがれ、卒業後に再びアメリカに渡ります。ニューヨークの劇団でインターンをするためでしたが、そこで初めて、人形師はボランティアな仕事で、生活できないことを知ったのです。そんな挫折感の中で、夫となるミュージシャン